

## チュウジシギの地理的変異とオオジシギとの識別

小田谷嘉弥 (我孫子市鳥の博物館)

チュウジシギ *Gallinago megala* は旧北区の中部～東部に繁殖分布し、日本においては数少ない旅鳥とされている。本種は単型種とされているが、隔離して沿海州地方に繁殖分布し、渡り時期に本州を通過すると推定される東側の個体群の形態に関する情報は乏しい。本種はオオジシギ *G. hardwickii* に酷似し、標識調査や博物館標本の同定などにおいて混乱が生じているため、地理的変異の有無を調査し、識別点に関する情報を整理することが重要である。

2012 年から 2016 年の春秋の渡り時期に、茨城県および千葉県の農地において標識調査を実施した。捕獲には、たも網とライトを用いた方法およびかすみ網を用いた。チュウジシギ 146 個体 (成鳥 112 個体、幼鳥 34 個体)、オオジシギ 66 個体 (成鳥 32 個体、幼鳥 34 個体) を新規に捕獲し標識放鳥した。2016 年 9 月下旬には、沖縄県石垣島において調査を行い、チュウジシギ 15 個体 (成鳥 3 個体、幼鳥 12 個体) を捕獲した。各部測定と換羽状況の記録、および写真撮影を行い、環境省の金属足環を付けて放鳥した。捕獲個体は全ての個体で尾羽に脱落がないか確認を行い、尾羽の枚数・外側尾羽の形状・測定値・羽色等から種の識別を行った。

関東地方で捕獲されたチュウジシギの計測値 (最小-最大値 (平均値±SD) mm) は、石垣島の個体よりも大きい傾向があり、特に尾長 (関東 50-61 (55.9±3.0) vs. 石垣島 48-57 (51.9±2.2)) と露出嘴峰長 (関東 62-74.2 (68.9±3.3) vs. 石垣島 59.2-70.1 (64.1±3.4)) で顕著だった。また、過去に記載されている香港等における計測値よりも大きかった。尾羽の枚数は、石垣島の個体で 21-22 枚の個体の割合がより高かった (関東 1.3% vs. 石垣島 33.3%)。関東地方のチュウジシギの 112 個体の成鳥のうち、93 個体で初列風切の換羽が完了しており (83.0%; PMS (Primary Moulting Score)=50)、一方で、初列風切の換羽が完了していないのは 19 個体だった (PMS =30-49)。これまで知られていたチュウジシギ成鳥の換羽様式は、越冬地に到着後換羽を完了するもので、中継地で初列風切の換羽を完了している例はなかった。関東地方のチュウジシギの計測値は、最大翼長以外はオオジシギと大きく重複した。両種の幼鳥における初列風切の突出長および P10-P9 の長さの差は大きく重複し、種の識別に有効でないことが示唆された。秋の渡り時期のオオジシギの成鳥 18 個体のうち、15 個体では初列風切を全く換羽しておらず (PMS=0)、2 個体で内側 1-2 枚を換羽済みで、1 個体では全て換羽を完了していた (PMS=50)。

計測値、尾羽の枚数の割合、換羽様式に違いがみられたことから、チュウジシギには未知の地理的変異が存在する可能性が高い。東アジアにおけるジシギ類の識別に際しては、この変異に留意する必要があると考えられる。チュウジシギとオオジシギとの識別は、翼長の計測値が有効とされてきたが、成鳥の場合は初列風切の換羽状況も有効であることが示唆された。今後、これらの情報をもとに、ジシギ類の分類・識別の諸問題が解決されることが期待される。